

# たまのよこやま

特集

発掘された日本列島2013

地域展

発掘 江戸の華

— 発掘された江戸時代の出土優品展 —



発掘された日本列島 2013

# 地域展 発掘 江戸の華

— 発掘された江戸時代の出土優品展 —

## 特集にあたって

今号では、江戸東京博物館で開催される企画展「発掘された日本列島 2013」と同時に開催される地域展「発掘 江戸の華 — 発掘された江戸時代の出土優品展 —」をとりあげることにします。都内ではこれまで多くの江戸遺跡の発掘調査が行われており、東京都埋蔵文化財センターでも都心部の再開発に伴う埋蔵文化財調査を行ってきました。今回の地域展は、この発掘出土品のなかから江戸時代の息吹を伝える優品の展示を通して、都民の方に地元東京の文化財への理解を深めていただこうと、東京都、東京都江戸東京博物館ならびに当センターによって企画されました。

## I. 新宿区法正寺遺跡

所在地：新宿区岩戸町  
種別：寺院跡 墓地

調査地点は、江戸時代の法正寺の墓域にあたります。131基の墓が確認され、うち未改葬墓が48基確認されています。墓域はやや大型の旗本層と、小型で列状に並ぶ町人と低禄の武家層とに分かれています。前者の墓域に位置した84号墓を紹介しましょう。

### 84号墓と副葬品

墓は約1mの方形の穴に甕(常滑製)を納め、甕の上に3枚の石蓋をのせています。甕の中には、木炭が充填された木槨があり、この中に埋葬されたものと考えられます。副葬品として漆塗の化粧箱と紙入れ、延煙管、元文一分判金が出土しています。

化粧箱は身と蓋と中蓋のセットで、身と蓋の外表面には黒色漆に金時絵で鉄線唐草文が描かれており、中から多量の品々が出土しています。中蓋上には竹製の筆、簪があり、中蓋を開けると中に漆塗の化粧水入、漆塗の小箱、染付蓋物、染付合子、色絵盃、木製の根付が各1点納められていました。簪には桃を抱いた猿が毛彫りされています。漆小箱の外表面には化粧箱同様に唐草文が金時絵で描かれ、中には紫檀と推定される琴爪などが入っていました。染付合子には白色の固形物(白粉?)が残っていました。また紙入れには鼈甲製の留め具、柄鏡、懐中鏡などが入っていました。

残った人骨からこの被葬者は武家層に関わる30



1 84号墓副葬品



2 84号墓の出土状態

才代の女性で、埋葬された年代は18世紀末から19世紀初頭と考えられます。こうした副葬品は当時のこの階層の女性の墓制と愛用した身近な品々を伝えています。

### 今月の表紙

左上は、港区萩藩毛利家下屋敷跡から出土した地鎮具の金銅製の三鈿輪宝、左下は同じく永樂通寶の金銭・銀銭です。右下は、千代田区飯田町遺跡から出土した理兵衛焼の一括品です。

## はぎはんもうりけ II. 港区萩藩毛利家屋敷跡遺跡

所在地：港区赤坂九丁目

種別：大名屋敷 萩藩毛利家屋敷跡

発掘調査は、防衛庁（現防衛省）檜町庁舎移転跡地の再開発である東京ミッドタウン建設のために行われました。当地は江戸時代初期に萩藩毛利家屋敷となり、幕末には約12万㎡もの広大な屋敷地で、麻布下屋敷と呼ばれていました。通常下屋敷の機能は、庭園を主なものとした藩主の休息や遊興に使われるため、郊外に立地して建物等生活色の少ないものですが、当屋敷の場合藩主が暮らしていたため建物も多く、調査によっても建物跡をはじめ多くの生活の痕跡が確認されています。

### 地鎮遺構と出土遺物

地鎮遺構は屋敷地のほぼ中央にあたる土坑から出土しています。中には金銅製三鈷輪宝1、永樂通寶金銭2、永樂通寶銀銭1、寛永通寶銅銭7、カワラケ18、木製品（折敷？）1が意図的に埋納された状態で納められていました。

輪宝は密教において地鎮・鎮壇に用いられる法具



3 地鎮具出土状態 (57-3P-1号遺構)

4 底面に2つ置かれたカワラケ



です。純度の高い金・銀製の永樂通寶は通常の流通銭ではないと考えられます。また、寛永通寶は、寛永13年(1636)から鑄造され始めた「古寛永」と呼ばれています。カワラケは素焼きの土器皿で江戸のものではなく、関西地方のものと考えられています。

埋納された年代は、カワラケの製作年代と寛永通寶(古寛永)の流通時期から17世紀中葉と考えられます。

この「萩藩毛利家下屋敷出土地鎮具」は、発掘調査による類例のない出土内容と江戸大名屋敷で行われた地鎮儀礼を伝える優良な考古資料として、平成25年東京都指定有形文化財(考古資料)に指定されました。



5



6



【裏面】

9



7

8

#### 【萩藩毛利家下屋敷出土地鎮具】

カワラケ(5)・金銅三鈷輪宝(6)・永樂通寶金銭(7)・永樂通寶銀銭(8)・寛永通寶銅銭(9)

#### 地鎮と法具

地鎮は普請・作事に先立ち土地神に工事の安全を祈願する儀礼で、古代から行われています。江戸で確認されている地鎮遺構ではカワラケに輪宝を墨書した地鎮・鎮壇儀式を変化させながら踏襲していることがわかります。また、カワラケと共に呪符木簡を伴う例や、銭を埋納したのももあり地鎮には多様なあり方があるようです。

### III. 港区しおどめ汐留遺跡

所在地：港区東新橋一丁目

種別：大名屋敷 仙台藩伊達家上屋敷跡ほか



10 仙台藩伊達家上屋敷跡出土染付磁器大皿



11 染付磁器出土の地下室 (6I-060号遺構)



12 染付磁器の出土状態

汐留遺跡は現在の汐留シオサイトに位置しています。江戸時代には龍野藩脇坂家、仙台藩伊達家、会津藩保科家などの大名屋敷が並んでいました。大規模な発掘調査によって海浜部を埋め立てて造られた大名屋敷の姿が捉えられています。また、近代になって最初の鉄道駅として新橋駅に様変わりした鉄道遺構が確認されています。

#### ■ 染付磁器大皿

仙台藩伊達家屋敷の地下室（木組み製の地下貯蔵庫）から直径約40cmの磁器の大皿などが多量に出土しました。地下室の上層に密集して出土し、破碎したものを一括して投げ込んだ状態でした。破片を接合した結果、ほとんどが肥前産の染付磁器で、多量の大皿のほか碗、皿、鉢、猪口なども組み物として伴っていました。地下室の位置が屋敷の「奥向き」（奥方や子女の生活領域）であるため、ここで保管され宴席用の「器」として出番を待って使われたと考えられます。これらの磁器は19世紀初期に地下室が使われなくなった後に一括廃棄されたものと思われます。



13 化粧道具が出土した上水井戸  
(5H-042号遺構)

14 化粧道具の一括品

## ■化粧道具の品々

婦人の化粧に関わる愛用の品々と考えられます。見つかったのは上水井戸の中からで、どのような理由で捨てられたのか想像を駆り立てられます。陶器は京焼製で外面には色絵によって華麗に草花模様が

描かれています。化粧に使う筆立てや頭髮の櫛を浸ける鬢水入、水滴などがあります。磁器は肥前産の染付で、白粉をいれる合子や蓋物、紅猪口などです。大名の婦女子の化粧を物語る一括品です。年代は18世紀後半頃のもので

## IV. 新宿区市谷本村町遺跡

いちがやほんむらちょう

所在地：新宿区市谷本村町

種別：大名屋敷 尾張藩上屋敷跡

現在の防衛省を中心とする場所に位置します。尾張藩は石高61万石を越える徳川「御三家」筆頭として著名です。市谷邸は明暦2年(1656)に拝領し、翌年の明暦の大火を契機に上屋敷となります。その後屋敷の周辺を順次取り込みつつ拡大し、幕末までには7万5千坪(東京ドーム5つ分)を越える広大な屋敷となります。この屋敷は江戸時代に幾度となく火災にあったことが記録に残っています。

## ■尾張藩上屋敷跡出土の鬼瓦

おにがわら

この鬼瓦は大型の土坑から出土しました。この土坑からは他に多量の焼土や焼瓦も出土し、火災が原因で廃棄されたことは明らかです。尾張藩上屋敷の御殿に使用されていたもので、正面の瓦紋として尾張徳川家の替紋(裏紋)である五つ葵が付けられています。側面には「伊勢山田岩淵町 かわらや 中津氏近房」、「享保十乙巳歳 九月日」とヘラ書きが見られます。上屋敷は江戸時代を通じて4度の大きな火災で御殿を焼失していますが、ヘラ書きから、この鬼瓦は享保10年(1725)の火災後に御殿再建のために誂えられ、その後、延享3年(1746)の火災により焼け落ち、廃棄されたと推測されます。「伊勢山田岩淵町」は現在の三重県伊勢市岩淵町に当たり、遠く海運により運ばれてきたと考えられます。



15 五つ葵紋鬼瓦

(140-3X-2号遺構出土)



【右側面】

享保十乙巳歳  
九月日



【左側面】

伊勢山田岩淵町  
かわらや  
中津氏近房

16 五つ葵紋鬼瓦側面の刻み文字

## V. 千代田区飯田町遺跡

いいだまち

所在地：千代田区飯田橋三丁目

種別：大名屋敷 高松藩松平家屋敷跡

遺跡は、神田川と小石川の合流地点付近に位置する低地の遺跡です。この地は17世紀後半には大名屋敷(榊原家)となり、宝永3年(1706)以降幕末まで、水戸徳川家の分家である讃岐高松藩松平家の屋敷となっていました。

### ■ 735号遺構出土理兵衛焼

調査によって多くの近世遺物が出土しましたが、735号遺構は寛政4年(1792)の火災後の片付けのために掘られた土坑と考えられ、その際に被災した理兵衛焼を廃棄・埋納したものと考えられます。装飾は線刻・穿孔・貼り付け等精密で、模様も呉須・金彩等で唐花・竹笹などの繊細な絵付けが施されています。その器種は鏡台をはじめ特異なものであり、

「如意宝珠」などの意匠から神道系の祈祷・祭祀具とも考えられます。

### ■ 理兵衛焼について

理兵衛焼とは、高松藩の官用に使われた御庭焼です。御庭焼は江戸や国元の大名屋敷等で制作したやきもので、茶器などの趣味的な製品が多く見られます。理兵衛焼は、江戸時代初期に京都粟田口の作陶から生まれ、京焼風の趣を持つ繊細優美な作風です。江戸時代を通じて存続し現在も継続しています。

この735号遺構出土理兵衛焼は、出土資料の僅少性と理兵衛焼の性格を知る上で重要と考えられることから、平成17年東京都指定有形文化財(考古資料)に指定されました。



17 飯田町遺跡 735号遺構出土理兵衛焼

## Ⅵ. 渋谷区千駄ヶ谷大谷戸遺跡

所在地：渋谷区千駄ヶ谷五～六丁目

種 別：旗本屋敷ほか

調査は、新宿御苑付近の環状5号線（明治通り）整備事業に伴って実施されました。江戸時代の調査地は、江戸市中に隣接する千駄ヶ谷村に位置していましたが、江戸時代中期以降は旗本や御家人も屋敷を構えるようになります。これらの屋敷跡からは多くの陶磁器類が出土しましたが、中でも特筆される色絵磁器の托について紹介します。

### ■「鍋島焼」の色絵唐草文托について

托とは茶道具のひとつで、碗を置く台のことです。この托は、非常に薄く精巧に作られており、外面には染付で力強く唐草が描かれ、その周囲を黄褐色の錆釉で彩っているため、唐草がより鮮やかに引き立っています。鏝の裏には、焼く時に熱で垂れないように、支えるためのハリ痕が細かい列点状に並んでいます。

これと類似する資料は、佐賀藩主鍋島家に伝わった2点のみとされています。これらは、その由緒から今も多く謎に包まれている佐賀藩御用窯・鍋島焼の創始期の製品と考えられていることから、出土品としては唯一の本資料も、鍋島様式の成立を考えるうえで大変重要な成果となりました。

一方、このような特殊な焼きものが、なぜ下級武



18 磁器 色絵唐草文托 (SX-126 出土)

士の組屋敷内から出土したのかについても、大きな謎となっています。

(齊藤・内野・長佐古・大八木)

【写真提供】 1・2：新宿区教育委員会、3～18：東京都教育委員会

## 発掘された日本列島 2013 地域展示 が開催されます！



地域展示：「発掘 江戸の華 — 発掘された江戸時代の出土優品展 —」

期 間：平成 25 年 6 月 8 日（土）～ 7 月 25 日（木）

日 時：午前 9 時から午後 5 時 30 分

（土曜日は午後 7 時 30 分まで）

休 館 日：毎週月曜日（ただし 7 月 15 日は開館、翌 16 日が休館）】

場 所：江戸東京博物館 常設展示室 5 階第 2 企画展示室前

「発掘された日本列島 2013」展の開催に合わせて、江戸東京博物館では、地域展示「発掘 江戸の華 — 発掘された江戸時代の出土優品展 —」も開催しております。今年度の地域展示は当埋蔵文化財センターが発掘調査をした江戸遺跡を中心に展示し、紹介しております。

また、会期中には当センター職員が地域展示に関連したミュージアムトークも行います。皆さまのご来場をお待ちしております。

【ミュージアムトーク】

開催日時：6/14（金）・6/21（金） 午後 4 時から 30 分程度

# 縄文人のおしゃれ

— 装い・デザイン・色彩 —



平成25年度の年間企画展示は「**縄文人のおしゃれ—装い・デザイン・色彩—**」です。

みなさんは「おしゃれ」という言葉からどのようなことを連想しますか？素敵な服やアクセサリ、その着こなし方や生活スタイルなどを考える方が多いでしょうか。私もは考えました。「おしゃれ」には、人間の根源的な欲求やエネルギーが良く表れているのではないかと。

そこで、今回の展示は、「縄文人のおしゃれ」を通して“人間はなぜ身を飾り、美しいものを創造しようとするのか”を、皆さんと一緒に考えてみようというコンセプトで企画しました。

展示は、2つの大きなテーマで構成されています。

1つ目のテーマは「**身を飾る**」です。

一体なぜ私達は身を飾ろうとするのでしょうか？すべての身を飾る行為が見た目を良くすることだけを目的にしている訳ではありません。職場や行事での、集団の一員であることや目的を同じくすることを示す‘装い’などはその例です。また、祭礼や儀式を執り行う人達は、身を飾ることで神との交信を図り、それを司る特別な存在であることを周知させようともします。

このような、人が身を飾る理由とその行為は、非常に多様でありながら地域や時代を超えて普遍的であることがわかります。縄文人の装身具やその装い方、身体装飾は、このテーマの答に迫る大きなヒントとなることでしょう。

2つ目のテーマは「**美を創る**」です。

ヒトはモノをつくる中で、より綺麗に、より使いやすく工夫を重ねてきました。そうしてできあがったモノには、作った人と使う人に通じ合う美が宿ります。

では、縄文時代の人々は、どの様な美をどのように創作していたのでしょうか。

縄文時代の「美」と言えば、縄文土器につけられた様々な文様や、その造形の多様さに代表されるでしょう。日本を代表する芸術家の岡本太郎氏も、縄文時代の遺物に大きな影響を受けたことは有名です。

また、ヒトは、用途に応じた道具を作り使ってきました。旧石器時代や縄文時代の人々が「使い易さ」をとことん追い求めて作られたモノの形は、当時既に完成の域に達し一部は現代にも受け継がれています。こうして作り上げられたモノならではの魅力と美しさが、実用的な機能性に由来する“用の美”です。今回展示している縄文時代の‘斧’‘槍’‘鏃’などは、その典型的な例になります。

縄文人と私たち現代人の「おしゃれ」にかかわる美意識やデザイン感覚、色彩感覚がどれほど共通し、また異なっているのか？展示を通してぜひ体感してみてください。

展示期間は来年3月9日まで。“縄文人のおしゃれ”を通して、あなたのおしゃれ感覚を見つめ直してみませんか？  
(武内)

「たまのよこやま」の由来 万葉集巻二十之四四一七の防人となった夫の旅立ちに備えて、山野で馬に草を食べさせていたところ、馬は逃げてしまった。やむなく徒歩で多摩丘陵を越えることになってしまった夫を見送る妻の嘆きを詠った「赤駒を 山野に放し 捕りかにて 多摩の横山 徒歩ゆか遣らむ」(宇治部黒女) を由来としています。



たまのよこやま 93

2013年6月14日発行

東京都埋蔵文化財センター 〒206-0033 多摩市落合 1-14-2 TEL 042-373-5296 <http://www.tef.or.jp/maibun/>